様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３０７１

研究課題名（和文）清代モンゴルにおける駅站システムの運用実態とその政治・社会史的意義

研究課題名（英文）A study of the relay station system of Mongolia, established by the Qing Dynasty, and its political and social significance

研究代表者
中村　篤志（NAKAMURA, Atsushi）

山形大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：６０３７２３３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：清朝によってモンゴル全土に張りめぐらされた駅站システムは、清朝のモンゴル支配を強化するために作られたが、同時に、駅站によって、モンゴル地域内や中国本土との間の大規模な人や情報の移動が容易になったことで、モンゴル社会は大きく変化したと考えられる。しかし、今に至るまで、その歴史的意義はおろか基本的事実すら明らかになっていない。
そこで本研究では、満洲語・モンゴル語の行政文書や、実際に駅站を利用して往来した王公や官僚の日記、当時の地図など、多様な史資料を分析することで、駅站を介した人や情報の移動を具体的に解明し、その移動がモンゴル社会そして清の地域統合に与えた影響について分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
当初の計画通り、モンゴル国立中央文書館所蔵の駅站行政文書を網羅的に調査したほか、漢人、日本人、ロシア人など多くの日記史料を収集することができた。さらに研究の過程で、清代の地図史料や現地調査からも駅站研究に必要な情報を得ることができた。これら諸資料の分析から、当時の社会の流動性、駅站の管理体制、駅站をとりまく社会状況などを具体的に解明することができた。
総じて、駅站を社会史的文脈のなかで位置づける視点を提示し、そのために必要な諸資料の所在を明らかにし、現地調査なども含めた多角的分析の必要性と今後の可能性を示したことが本研究の意義と言える。

研究成果の概要（英文）：The Qing Dynasty designed the relay station system across Mongolia for the purpose of strengthening their control across Mongolia. At the same time, this system facilitated the movement of people and information on a large-scale, bringing about major changes in Mongolian society. Even the basic facts, not to mention historical significance, remain understudied, however. This research project analyzes the movement of people and information through the relay stations and investigate their influences on Mongolian society, by examining a wide range of sources including official documents in Manchu and Mongolian languages as well as maps and travelers' journals.

研究分野：清代モンゴル史

キーワード：モンゴル　清朝　駅站　行政文書

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の清朝藩部統治研究は、主に地域社会の自律性に注目してきたが、一方で、そのような自律的な藩部を、清朝がいかにして統合していたのかについてはなお未解明な点が多い。本研究では、清朝の地域統合を支えた基礎インフラとしての駅站網に注目した。

モンゴル全土に張り巡らされた駅站は、清朝がモンゴルを政治的に支配するための重要なインフラであったが、同時に、駅站の維持のためにモンゴル各地から多くのモンゴル人官兵が徴用され、長期間集団で生活しながら、中国本土やモンゴル各地を往来する人々を通過させていたのである。つまり、駅站を結節点として、民族や身分階層・出身地を異にするさまざまな人が集散していたのであり、このような駅站を介した人そして情報の移動は、清朝の地域統合だけでなくモンゴル社会の在り方にも大きな影響を与えたと考えられる。

しかし、従来の研究では、大清会典などの編纂史料に表れた駅站制度の概要を述べるにとどまっており、駅站の政治的・社会的意義はおろか、研究の基礎となる史料の所在すら十分に明らかになっていない。

そもそも先行研究では、清朝はモンゴル社会を「旗」に再編し、旗を数多く設置することで行政単位を細分化するとともに、旗を越える移動を制限することで社会の流動性を抑えたとする理解が大勢を占めてきた。当時の社会は、旗外との接点や情報を得る機会が少ない、閉ざされた社会であるかのように理解されてきたのである。

しかしそれらは、編纂法典などに基づく制度的枠組みの研究であり、社会レベルでの移動の実態が実証的に解明されたわけではなかった。

２．研究の目的

以上の問題意識から、本研究では、駅站および駅站を介した人の移動の実態を、社会レベルで実証的に解明し、その社会史的意義を明らかにすることを大きな目的として設定した。そして、研究のそのものの前提となる、基礎史料の所在すら十分解明されていないことから、本研究では、史料の調査・収集・分析を大きな柱として設定し、その史料に合わせて、具体的に以下の３つの課題を設定した。

第一に、既刊の文献や史料集などから駅站や人の移動に関する記述を再度網羅的に抽出・分析し再評価するとともに、今まで紹介されて来なかった史料群にアクセスし、その所在状況や残存状況などを把握し、その史料的価値を明らかにすることを目的とした。

研究開始時点では、主にモンゴル国に存在する満洲語・モンゴル語で書かれた駅站に関する行政文書、および実際に駅站を往来した漢人・ロシア人などが書き残した日記史料の二つを主な対象として設定した。

第二に、主に行政文書の分析から、当時の駅站がどのように運用され、どの程度の人や文書が往来したのかなど、駅站の運用実態をなるべく具体的に、数的に解明することを目的とした。

第三に、主に日記史料の分析から、実際の駅站の運用状況、駅站を取り巻く社会や人々の状況を確認するとともに、個人レベルの移動体験による対モンゴル認識の変化などを解明することで、駅站を介した人や情報の移動がモンゴル社会に与えた影響、その歴史的意義について考察することを目的とした。

３．研究の方法

以上の目的に従って、本研究は具体的に３つの研究方法を設定した。

第一は、既刊史料、既刊論文のなかから駅站や人の移動に関する記述を抽出・分析し、その成果を公開する。

第二は、主にモンゴル国立中央文書館に所蔵されている膨大な駅站関連の行政文書を調査し全体像を把握するとともに、部分的に収集し分析することで、駅站の運用状況を解明する。

第三は、日本を始め中国・モンゴル・台湾の各地に存在する駅站を往来した人々が残した日記史料の収集とその分析である。

また主にモンゴル国の研究者と共同で調査・研究に当たることで、調査を効率化するだけでなく、課題意識を国際的に共有することを目指した。

４．研究成果

研究成果を端的にまとめるならば、本研究によって、駅站を社会史的文脈のなかで位置づける新たな視点を提示し、そのために必要な諸史料の所在、現地調査なども含めた多角的分析の重要性・可能性を明らかにしたことであろう。

まず、本研究の重要な柱である研究の基礎史料の調査・収集については以下のような成果が上がった。

当初研究の中心として考えていたモンゴル国立中央文書館所蔵の駅站関連の行政文書については、網羅的な調査を行うことができその全体像を把握することができた。また、日記史料についても、漢人・ロシア人以外に日本人などの日記史料を収集することができ、多方面から駅站とそれを取り巻く社会の具体的状況を分析することができた。

さらに大きな成果として、モンゴル国の研究者と共同研究を進める過程で、清代の地図史料に駅站がさまざまな形で描かれていることが判明し、各種の地図史料の調査を進めることができた。また、現地での聞き取り調査も駅站研究に有効であることが判明し、共同研究者の助けを得

ながら現地調査の成果も反映させることができた。当初予定していたものではなかったが、このような新たな史料と新たな研究方法を明らかにできたことは、本研究の大きな成果と言えるだろう。

次に、具体的な研究成果として、主に以下の 2 つがあげられる。

第一に、研究の前提となる当時の社会の流動性について、主に既刊論文・既刊史料から分析を加えた。清朝がモンゴルに課したアルバ（賦役）の多くが人の移動を伴っていることに注目し、その移動を数的に把握することを試みた。当時、辺境の見張り台や駅站などを維持するために、モンゴル人官兵が多く徴用され派遣されたが、その人数や規模は未解明であった。

主にモンゴルで作成されたアルバ関連の帳簿を分析し、これらアルバで旗外に派遣された人の総数は少なく見積もって全人口の 4%になったと考えられ、人々が旗外に出て長期間滞在する機会は一定程度存在したことがわかった。

駅站はこれらのモンゴル人官兵によって維持され、モンゴル各地と中国本土とを結びつける機能を果たしたが、日記史料などの分析から、駅站を往来した人々は清朝の大臣や官兵だけでなく、漢人商人やロシア人商人なども含まれ、駅站が、地域社会において、民族や身分階層・出身地を異にするさまざまな人が集散し、物や情報が集まる結節点として機能していたことを明らかにした。

第二に、個別の駅站ルートを例に実証的研究を行った。対象としたのはフレー（今のウランバートル）以南 14 駅站で、これらの駅站は、北京とフレーさらにはロシアとを結ぶ重要ルートであるにもかかわらず、制度上は支線と位置づけられたため、駅站名称すら史料間で異同がある状況にあった。そこで、モンゴル国立中央文書館の清代公文書のほか、地図や日記を分析し、さらに現地調査の成果も取り入れ、多角的にこの駅站を分析した。

その結果、14 の駅站の名称とその時代的変遷、設置された場所の状況（地形）などが明らかになり、このルートは支線とされてはいたが、長期間体系的に運用されており、重要ルートと位置づけられていたことがわかった。

さらに、駅站には寺院や倉庫など多くの固定施設が併設されており、駅毎に井戸や水場、一定の土地を占有していたほか、駅站が 1940 年代まで実際に利用されており、遊牧社会における重要な定点として存在し続けたことを明らかにした。

以上が成果の概要である。本研究では、当初想定した以上の史料を収集することができたが、反面、論文として公開できたのはまだその一半である。今後はさらに分析を進め、継続して成果を公開していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中村篤志、ムンフバートル	４．巻 34
２．論文標題 清代モンゴルのフレー以南14駅站に関する基礎的考察	５．発行年 2019年
３．雑誌名 内陸アジア史研究	６．最初と最後の頁 95-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 中村篤志	４．巻 別冊4
２．論文標題 清朝治下ハルハ=モンゴル社会における人の移動と駅站	５．発行年 2018年
３．雑誌名 北東アジア研究	６．最初と最後の頁 163-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 アルタンザヤー、中村篤志訳	４．巻 18
２．論文標題 ［翻訳］モンゴルにおける印信ホトクトのシャビ=ナルの牧地について	５．発行年 2017年
３．雑誌名 山形大学歴史・地理・人類学論集	６．最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　4件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 ドローンからみたモンゴルの都市遺構：その歴史的意義（モンゴル語）
３．学会等名 Mongolia-Japan center　公開講演会
４．発表年 2020年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 モンゴル高原を空から見る：ドローンを使った歴史研究
３．学会等名 東北学院大学・アジア流域研究所主催公開講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 結集するハラチン・ディアスポラ：遊牧社会における駅站の諸相
３．学会等名 国際シンポジウム「清帝国におけるモビリティ：モンゴルの場合」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 留まるモンゴル人・行き交う漢人：清代の駅站・隊商路をめぐって
３．学会等名 山形大学公開講演会兼研究果報告会「遊牧社会の「日常」を描く：清代モンゴル史研究の新視角」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 清代漠北モンゴルの駅站をめぐって：2018年調査報告
３．学会等名 「前近代中央ユーラシアの南北交通システムの総合的研究」第２回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 清代のハルハ社会における移動（モンゴル語）
３．学会等名 モンゴル国立大学歴史学部セミナー（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 清代の駅站とハルハ社会：サイルオス駅站を事例に（モンゴル語）
３．学会等名 History of Eurasian Nomads: state, society and culture（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 清朝時期喀爾喀蒙古的人員流動探析
３．学会等名 国際学術研討会「清朝政治発展変遷研究」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 清朝治下モンゴル社会における人の移動と駅站
３．学会等名 島根県立大学NEARセンター拠点プロジェクト第２回国際シンポジウム「北東アジア：胎動期の諸相」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 藤田嗣治の描いた「蒙古人」力士をめぐって
３．学会等名 第54回 野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中村篤志
２．発表標題 藤田嗣治「北平の力士」と清朝宮廷相撲
３．学会等名 山形大学歴史・地理・人類学研究会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 岡洋樹編著、中村篤志（分担執筆）	４．発行年 2020年
２．出版社 東北大学東北アジア研究センター	５．総ページ数 -
３．書名 東北アジアにおける人の移動と共生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考